

「大切な水をどう守るか」

沖縄県 西原町立西原中学校三年 照屋 幸加

「水に慣れる」という慣用語がある。意味は、新しい土地や環境に慣れることだ。ここ西原町に引越してきて三年目をむかえ、私はやっと水に慣れることができた。

私は小学校四年生から六年生まで三年間、石垣島白保に住んでいた。そこには山が多く、きれいな川がたくさん流れている。その河口にはマングローブ林が広がっていて観光スポットとして人気がある場所だ。また、石垣島の水道水はおいしいことでも有名だ。水道水をペットボトルに詰めた「石垣島の水道水」を無料配布したこともあるそうだ。つまり、石垣島はおいしい水で溢れている島なのだ。沖縄本島に帰ってきて、私の家にウォーターサーバーを置くようになってしまった。初めはその水を飲むことに慣れず、水道水を飲んでいた。だが、今ではもう水道水はほとんど飲まなくなってしまった。そんな時は以前見たニュースのことを思い出した。そのニュースは沖縄の取水量についてだった。沖縄では人口や観光客が増え、県の企業がダムや河口から取水する量は、日本に復帰した年の1日平均22万7千トンから2017年度には44万6千トンに倍増した。地球温暖化による水資源の影響も危惧されている中、少しづつ水が不足していることは大きな問題だと考える。

それから私は水不足について調べていくうちに、水の「平和」について考えるようになった。水を守ることは「平和」につながることに気付かされたのが、「平和」を守った中村哲さんだ。中村さんは「砂漠を緑にかえたお医者さん」と呼ばれている。アブガニスタンで医療支援をしていたころ、アブガニスタンは厳しい干ばつにより食料不足となっていた。そのため子どもは汚染された水を飲むようになり、その子どもたちを助けるため中村さんは立ち上がったのだ。その方法として、「緑の大地計画」というものが行われた。その計画は今までに成功したことのない事例であり、用水路や農地の整備を手作業で行うものであるため、多額の資金

と人員が必要だった。現地の人々もきつい作業だったにもかかわらず、40人以上の人々が毎日文句も言わずに働いたそうだ。それは恐らく中村さんを信じてみようと考えたからかもしれない。また、異国の人の取り組みを信じないといけないほど苦しんでいたことも分かる。

そして六年後、その努力が実を結び「死の谷」と呼ばれていた砂漠が緑に生まれ変わったのだ。その後、残念ながら武装集団に銃撃を受け、今はまだ帰らぬ人となってしまった中村さんだが、生前に現地の人々が自分たちで修理・管理をしたり、用水路のプロジェクトが継続できるよう、充実した設備や訓練校などを残している。今でもアブガニスタンでは干ばつが広がり、水や食料不足が問題となっている。しかし、中村さんの意思を引きついだ人々が日々努力を続けてほしいと思った。

私が石垣島で見ていた緑は、決して当たり前ではなく「水不足」はどの国でも起こりうることだ。もしかしたら近い未来、日本や沖縄でもアブガニスタンのような状況が起こってしまうかもしれない。自分の将来を守るために、中村さんのように偉大なことはできなくても一人一人にできることはあると思う。SDGsを意識し、自然について自分の事として考える。例えば、歯を磨きながら水を出しっ放しにしないことや、10円でもいいから水を守るボランティアなどに募金したり、水を守るためにどんなことをすればいいか話し合い、アイデアを出すことが大事だと思う。

中村さんが言った言葉の中に「誰もが行きたがらぬところへ行け、誰もがやりたがらぬことなせ」という言葉がある。みんながやっていないからやらなくていいではない。みんながやっているからやっていいわけでもない。水を守るためにもどうすべきか、全世界の人が自分の事として考えることが必要だ。